

## 1 地球温暖化対策の現状と課題

---

私たちの暮らしは、昔に比べ便利で快適なものとなっている。その一方で環境に負荷を与えてきた。

エネルギーの消費によって発生する温室効果ガスは、異常気象や海面上昇、食糧危機などを引き起こす地球温暖化の主な要因とされている。

また、必要以上の豊富な商品は大量の廃棄物を生み出し、開発による自然破壊は生態系に大きな影響を与えている。

私たちは利便性を追求するあまり、様々な環境問題を生み出してきている。

こうした中、2015年にパリで開催された「COP21」で「パリ協定」が採択され、「世界的な平均気温上昇を産業革命以前に比べて2℃より十分低く保つとともに、1.5℃に抑える努力を追求する」ことや「今世紀後半に人為的な温室効果ガスの排出と吸収源による除去の均衡を達成するために、早期の削減を行う」ことなどが合意された。

国においては、パリ協定を踏まえた国の地球温暖化計画（2016年5月）で、家庭部門における2030年度の温室効果ガス排出量を2013年度比で40%削減する目標を設定し、家庭部門の対策として、国民一人ひとりの意識改革やライフスタイルの見直しを推進している。

島根県では、県の地球温暖化対策実行計画（2011年3月）で、2020年度までに温室効果ガス排出量を1990年度に比べて23%削減する目標を掲げ、地球温暖化対策を進めてきた。

家庭向けには、（公財）しまね自然と環境財団や市町村地球温暖化対策協議会と連携して、各家庭に応じた省エネなどの具体的な助言を行う「環境家計簿」や「うちエコ診断」を実施してきた。また、島根県連合婦人会と協力し、楽しみながら行う「足し算の省エネ」という全国初の取り組みや、「スマートライフマン」というキャラクターを用いたユニークな啓発などに取り組んできた。

さらには、しまねエコライフサポーターが、省エネの普及啓発など各地域における地球温暖化防止活動を支えてきた。

事業者向けには、島根県中小企業団体中央会と連携して、省エネアドバイザーを事業者に派遣し、具体的な省エネルギー対策の情報提供を行ったり、事業者の経費削減につながる省エネ診断などを実践してきた。

こうした先駆的な取組みを行ってきたにもかかわらず、県の温室効果ガス排出量（エネルギー起源 2014 年度）は、1990 年度比で 16%増加した。運輸部門は減少したものの、その他の部門では増となっており、特に家庭部門は 50%の増加と、家庭部門の温室効果ガス排出量の削減が急務となっている。

島根県の 1 世帯あたりの電力消費量（2014 年度）は、1990 年度より約 16%増加となり、右肩上がりで推移している。家庭で使用される暖房の熱源が灯油から電気によっていった影響により、2000 年度を境に電力の消費量が灯油の消費量を上回ることとなり、家庭においては電気を中心とする省資源・省エネの取組みが必要になる。

【温室効果ガス排出量(CO<sub>2</sub>)】

全国

(単位:百万トンCO<sub>2</sub>)

	1990年度	2014年度	増減
温室効果ガス排出量(CO <sub>2</sub> )	1,067	1,189	11%
産業部門	502	426	-15%
運輸部門	206	217	5%
業務部門	137	261	91%
<b>家庭部門</b>	<b>131</b>	<b>192</b>	<b>47%</b>
エネルギー転換部門	91.1	93.7	3%

島根県

(単位:千トンCO<sub>2</sub>)

	1990年度	2014年度	増減
温室効果ガス排出量(CO <sub>2</sub> )	4,875	5,675	16%
産業部門	1,788	2,015	13%
運輸部門	1,407	1,133	-19%
業務部門	731	1,102	51%
<b>家庭部門</b>	<b>949</b>	<b>1,425</b>	<b>50%</b>
エネルギー転換部門	0	0	0%

一人ひとりが家庭でできることは、

- ・家電は、消費電力の大きい冷蔵庫には、側面に大量のプリント貼付をしないで、食材を詰め込みすぎないようにする。
- ・エアコンは、定期的なフィルターの掃除や、暖房時には植物や濡れタオルで湿度を上げ、冷房時には扇風機やサーキュレーターを使い冷気を循環させる。
- ・住宅は、窓の断熱がポイントで、夏はグリーンカーテンで外から遮熱、冬はプチプチで内から断熱する。
- ・食材は、旬のもの、近くのを、使い切れる量・数で調達する。
- ・先人の知恵である打ち水やすだれ、よしず、扇子・うちわなどで電気を使わず、風流で粋に涼をとる。

こうした取組みにより、家庭部門の温室効果ガス排出量の削減につなげていく。

現行の島根県の地球温暖化対策は、平成 23 年度から始めて 6 年が経過し、現代のニーズにあった新しい対策に取り組む必要がある。

そして、県民一人ひとりが今の暮らし方を見つめ直し、環境にやさしいライフスタイルに変えていくことが、今求められている。

特に、これからの島根を担っていくのは、現在の20～30代の若い人たちである。

今の若い世代は、華やかな生活を望む人は少なく、海や山が近く自然に囲まれた生活をしたい、家族や恋人、友達を大切にする生活（ライフアンドワークバランス）を重視しつつ、技術や感性を生かして自分にしかできない仕事をしたい意向がある。温暖化など環境問題に高い関心を持ち、地球の未来や将来世代に対する責任感から、自分たちの世代が中心となって社会を変えるべきと考えており、それを実現するため持続可能なライフスタイルを志向している。

#### 【学生アンケート集計結果から】

そのライフスタイルは、

- ・家庭や地域の人とつながって、助け合いがある暮らし
- ・豊かな自然と共生し、ゆったりのんびりした生活
- ・私有への関心が薄れ、他者が所有するモノをシェア（共有）する志向などである。

具体的には、

- ・祖父母がいない若い夫婦が子育てで困っている時に、近所の高齢者が一時的に子どもの面倒をみってくれる
- ・野山や川、海に出かけ、竹を使ってほうきを作ったり、どんぐりや貝殻などを子どものおもちゃにしたり、自然の中で趣味を楽しみながら暮らす
- ・自宅で採れた季節の野菜を隣近所におすそ分け

こうした暮らしは、島根県では、古くから地域でごく自然に営まれてきた。

若い世代の価値観や生活行動は、今後、社会の潮流となっていく可能性が高いため、若い世代が求めるライフスタイルにマッチした環境にやさしい暮らし方を提案することが重要である。

そして、島根らしい環境にやさしいライフスタイルを若い世代に発信し、島根への関心を高めていく必要がある。

そこで、若い世代を意識した提案を行うため、20代、30代の若手を中心に構成されたプロジェクトチームを立ち上げて、検討することとした。

「新しい何か」を求めるため、未来がどうなっているかを想像し、そこから今に立ち戻って“やるべきこと”を考えるやり方であるバックキャストという手法により、議論を進めた。

私たちが持続可能な形で生活していくには、2030年のしまねの暮らしがどのような姿になっていけばよいのか。このプロジェクトで想定する未来は、国の地球温暖化計画における温室効果ガス排出量の削減目標年度であり、今の20～30代が社会の中心となって活躍している2030年としている。

プロジェクトチームでは、環境面だけでなく、暮らし、消費行動や住まい、人が集える場や交通、資源とエネルギーといったライフスタイルの多様な側面を想定し、未来のライフスタイルを描いている。2030年の暮らしの実現に向け、どのような取組みを進めていけばいいのかを提案する。

## 2. 検討チームの取組み

---

### 2-1 検討チームの設置

#### (1) 設置目的

地球温暖化対策としてあらたに取り組む、「しまね流エコライフ発信プロジェクト」のターゲットを若い世代に設定していることから、若い世代の多様な意見や考えを取りまとめることを目的とする。

#### (2) 構成員

氏名 (五十音順・敬称略)	所 属 等
赤繁 久恵	母里の郷コミュニティ (移住者)
伊藤 玲子	しまね自然と環境財団松江事務所
今井 勇樹/小木曾博幸	島根大学生
大畑 蘭	イラストレーター
狩野 まゆみ	島根県環境生活部 環境政策課
河西 海里/藤井 春菜	島根大学生
清水 妙子	島根県地球温暖化防止活動推進員 しまね環境アドバイザー
関 耕平	島根大学法文学部法経学科 准教授
高砂 範子	(株)高砂醤油本店
田中 輝美	ローカル・ジャーナリスト
土江 一志	島根県環境生活部 環境政策課
福島 丈太郎	松江青年会議所副理事長 (株)太陽水道工事 代表取締役

#### (3) 役割

- ・ ミーティングによる現状分析
  - ・ 大学生との意見交換
  - ・ 2030年しまねの暮らしロードマップの作成
- ・ 施策、取組み内容の検討及び提案

## 2-2 検討チームの活動

### 活動の内訳（日程順）

日 程	内 容
平成 29 年 6 月 1 日(木)	“ワールドカフェ”により①エコライフ ②シェアライフ ③シンプルライフのテーマでオープンな話し合い
平成 29 年 6 月 7 日(水)	第 1 回会議の意見、アイデアについて具体化に向けての議論
平成 29 年 6 月 22 日(木)	「2030 年のしまねの暮らし」を地域、経済、環境の視点から議論
平成 29 年 7 月 12 日(水)	「2030 年のしまねの暮らし」を実現するためには、3 年後 5 年後はどのような姿になっていけば良いのか議論
平成 29 年 7 月 12 日(水)	大学生との意見交換会 2030 年頃の理想の暮らしや消費、環境についてアンケート、意見交換
平成 29 年 7 月 27 日(木)	「しまね流エコライフ実現に向けた施策の提案」について話し合い
平成 29 年 8 月 5 日(土)	関東在住島根県出身の若者との意見交換会 2030 年頃の理想の暮らしや島根への思いについて意見交換

### 3. 見えてきた将来

#### 3-1 若者の考える未来

島根大学の学生に対する意識調査を通して若者が考える未来の暮らしは次のとおり。

〔意識調査〕 実施期間 平成29年7月11日(火)～7月12日(水)

回答数 257名

出身地域 都市部148名(57.6%) 農村部109名(42.4%)

##### (1)2030年頃(回答者が35歳頃)の理想の暮らし

プライベートを犠牲にしても出世や高い報酬を求めたいという人は少なく、家族や恋人、友達を大切にする生活(ライフアンドワークバランス)を重視しつつ、技術や感性を活かして自分にしかできない仕事をしたいという志向がある。

また、華やかな生活を望む人は少なく、海や山が近く自然に囲まれた生活をしたいが、近くに店舗は欲しいという志向がある。

#### アンケート結果

設問	選択肢		どちらでもない		そう思わない		無回答	
	回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率
プライベートを犠牲にしても、会社の中で出世をしたい	26	10.1%	58	22.6%	160	62.3%	13	5.1%
残業や休日出勤があっても、高い報酬の仕事をしたい	44	17.1%	71	27.6%	130	50.6%	12	4.7%
技術や感性を活かして、自分にしかできない仕事をしたい	144	56.0%	61	23.7%	40	15.6%	12	4.7%
仕事よりも、友達や恋人、家族を大切にする生活を送りたい	155	60.3%	77	30.0%	14	5.4%	11	4.3%
海や山が近く、自然に囲まれて暮らしたい	118	45.9%	66	25.7%	60	23.3%	13	5.1%
インターネット通販があれば、近くにショップ、店舗はあまりなくても構わない	37	14.4%	40	15.6%	167	65.0%	13	5.1%
都会で最先端の話題のショップ、エリアで生活を送りたい	61	23.7%	74	28.8%	110	42.8%	12	4.7%
豪華な家に住んだり、高級な宝飾品やブランド品を身につける華やかな生活をしたい	25	9.7%	57	22.2%	163	63.4%	12	4.7%

【アンケート問3参照】

## (2) 消費における価値観

消費の際に、中古品やリサイクル品を購入することについて、過半数の人は抵抗感をさほど持っていない。

一方で、シェア（シェアハウス、カーシェアリングなど）については、過半数の人が抵抗感を持っており、自分の使うモノは購入したいと考えている。

### アンケート結果

消費の際、シェアすることについてどう思いますか。

※シェアハウスでの共同生活やカーシェアリングをイメージして下さい

A：シェアすることに抵抗はない

B：自分の使うモノは、購入したい

選択肢	回答数	回答率
Aに近い	42	16.3%
どちらかといえばAに近い	48	18.7%
どちらかといえばBに近い	96	37.4%
Bに近い	69	26.8%
無回答	2	0.8%

消費の際、中古品やリサイクル品を買うことについてどう思いますか。

A：中古品やリサイクル品を買うことに抵抗はない

B：新品のモノを買いたい

選択肢	回答数	回答率
Aに近い	90	35.0%
どちらかといえばAに近い	61	23.7%
どちらかといえばBに近い	72	28.0%
Bに近い	33	12.8%
無回答	1	0.4%



家族や地域の人とのつながり、助け合いがある暮らしに魅力を感じますか。

選択肢	回答数	回答率
感じる	144	56.0%
どちらかといえば感じる	83	32.3%
どちらかといえば感じない	11	4.3%
感じない	10	3.9%
わからない	8	3.1%
無回答	1	0.4%

地球温暖化を防ぐために、あなたができることは何ですか。

選択肢	回答数	回答率
エコカーやLED電球など、環境に良いモノを買う	121	47.1%
効率的でシンプルな暮らし	78	30.4%
モノをなるべく買わない	25	9.7%
我慢する暮らし	26	10.1%
伝統文化や先人の知恵を取り入れた暮らし	16	6.2%
自然と共生した暮らし	35	13.6%
ボランティア活動に参加	16	6.2%
その他	6	2.3%

【アンケート問5、9、10、13参照】

#### 考察

「家族や地域の人とのつながりや助け合いがある暮らし」に魅力を感じる人は88.3%に上ることや、地球温暖化防止の取組みとして「効率的でシンプルな暮らし」を挙げる人も多いことから、将来的にはシェアについても理解が進むものと推察される。

### (3) 環境問題に対する意識

75.9%の人が地球温暖化など地球環境問題に「関心がある」と回答した。また、地球温暖化を防ぐため自分にできる取組みとして「エコカーやLED電球など、環境に良いモノを買う」と回答した人が47.1%だった。

一方で、実際に消費する時に重視するものとしては、「安さ」「利便性」「品質」という回答が多く、「環境への負荷」を挙げた人は1.2%だった。

#### アンケート結果

地球温暖化、オゾン層の破壊、熱帯雨林の減少などの地球環境問題に関心がありますか。

選択肢	回答数	回答率
関心がある	50	19.5%
ある程度関心がある	145	56.4%
あまり関心がない	52	20.2%
関心がない	7	2.7%
わからない	2	0.8%
無回答	1	0.4%

地球温暖化を防ぐために、あなたができることは何ですか。(再掲)

選択肢	回答数	回答率
エコカーやLED電球など、環境に良いモノを買う	121	47.1%
効率的でシンプルな暮らし	78	30.4%
モノをなるべく買わない	25	9.7%
我慢する暮らし	26	10.1%
伝統文化や先人の知恵を取り入れた暮らし	16	6.2%
自然と共生した暮らし	35	13.6%
ボランティア活動に参加	16	6.2%
その他	6	2.3%

消費の際、重視するものは何ですか。（高いものから2つ選択）

選択肢	回答数	回答率
安さ	166	64.6%
利便性	135	52.5%
デザイン	68	26.5%
品質	113	44.0%
ブランドやメーカー	26	10.1%
環境への負荷	3	1.2%
その他（具体的に	2	0.8%

地球温暖化を防ぐために、今の社会を変えることができますか。

A:自分たちの世代が中心（主役）となって変えるべき

B:自分たちの年上の世代が中心（主役）となって変えていくべき

C:自分たちの年下の世代が中心（主役）となって変えていくべき

選択肢	回答数	回答率
Aに近い	147	57.2%
Bに近い	75	29.2%
Cに近い	15	5.8%
変える必要はない	18	7.0%
無回答	2	0.8%

【アンケート問8、11、13、14参照】

#### 考察

環境への意識は高いが、それが消費行動につながっている人は少ないという結果から、環境への意識と消費行動のギャップがあることがうかがえる。しかし、過半数の者が「地球温暖化を防ぐために、自分たちの世代が中心となって社会を変えるべき」と考えていることから、環境に良い商品へ補助金を出して価格を抑えたり、生活における消費行動において地球環境を意識することができるような仕掛け（例 カーボンフットプリントなど商品ごとのCO<sub>2</sub>排出量の見える化）が展開されたりすれば、地球環境問題に対する意識の高まりと環境にやさしい行動に取り組む者の広がりが期待できる。

## 3-2 2030年しまねの暮らし

### 1. 2030年のライフスタイルから考える

身近な自然とともに、日常の何気ない暮らしを楽しむライフスタイルが広がっている。

顔が見える関係、風通しの良い関係といった豊かな人間関係が構築された地域コミュニティでは、若い人と高齢者との支え合う関係が出来ている。

消費行動から環境保全や地域社会づくりなどに貢献する視点（エシカル消費）が浸透し、環境にやさしい消費行動が定着している。

住居は、日本家屋の良さを活かしながら、夏には自然の涼風を取り入れ、太陽熱利用や断熱改修など既存家屋のリフォームによる、環境の良い家に住み続けられる工夫がなされている。

#### 《きっとできる！こんなこと》

- ・価値観の転換をする。（モノがなくても楽しい暮らし、モノを大切にする。仕事から家庭・地域へのシフト）
- ・SNSなどを利用し不要なモノを欲しい人に譲る仕組みでwin winの関係がある。
- ・少々高くても、環境に負荷の少ない長く使える品質の良いモノを選ぶ。
- ・先人の知恵を知り、打ち水やグリーンカーテン、よしずやすだれなど楽しく手軽にできるエコな省エネに取り組む。
- ・宅配便は再配達をせずコンビニなどで受取る。
- ・断熱改修された空き店舗や空き家に集い、情報発信の場とする。  
その改修は、アフターケアも考えて地元工務店にやってもらう。
- ・エコに取り組んでいるカッコいい自分を発信する。

### 2. 2030年のコミュニティから考える

全国の都市では人口の過密と他人への無関心で、農山漁村は過疎による無人化で、人と人とのつながりが薄れているが、島根では、助け合いのある安心した暮らしが維持されている。

小地域ごとの中心スポットには、環境に配慮したコミュニティ施設やお店があり、多世代の生活・教育・文化・防災などの拠点として機能している。周辺

各戸からの移動手段が確保され、自家用車がなくてもストレスなく集えるなど、安心して生活できる社会の仕組みが整っている。

断熱改修された空き店舗では、お年寄りが集まり活躍している。夕方には子どもたちがやって来て、先人の知恵を学んでいる。

リフォームにより生まれ変わった蔵は、“自分博物館” “宝物疎開地”として都会の人に貸し出され、都会から定期的に人が訪れ地域の人と交流している。

### 《きっとできる！こんなこと》

- ・コミュニティ食堂(子どもや高齢者に提供。空き店舗を利用し日替わり店長)では、コミュ畑(※1)の食材やジビエ(※2)が使われ食の地産地消が進んでいる。
- ・地域での助け合い、経済の地域内循環が形となり、料理を小さい地域(濃いコミュニティ)で交換するなど、おすそ分けの習慣が復活している。
- ・地元の農家と知り合いになって、農産物を直接購入できる。
- ・自宅の空き蔵をリフォームして、“宝物疎開地”として都会の人に貸し出す。
- ・クールスポット、ウォームスポットが設定され、そこではホームセンターのDIY教室や、小学生の夏休み宿題対策としてエコマニアによる工作教室が行われる。

※1 空き地や屋上を活用してコミュニティで作る畑

※2 狩猟で得た天然の野生鳥獣の食肉(イノシシ、シカなど)

## 3. 2030年の「資源」と「エネルギー」から考える

地域外から持ち込んだエネルギー資源にできるだけ頼らない、省資源・省エネルギーの取組みが進んだ自立した地域づくりが行われ、域内循環により地域が活性化すると同時にゆとりある豊かな生活がある。

各地域にある小規模の再生可能エネルギー資源を活用したり、各地で食料などの地産地消を進めたりするなど、地域の資源を大切に暮らしができている。

### 《きっとできる！こんなこと》

- ・家庭ではペレットストーブを使ったり、地域では小川での小水力発電をするなど、エネルギーの自給自足ができている。
- ・家庭や地域で発電した電力は、電気自動車(EV)などへ蓄電し、発電した

電力をフル活用している。

- ・スポーツジムなどで身体を鍛えながら、人通りの多い交差点では人が歩くことにより発電できる「体力発電」の技術が進歩している。
- ・外出する時は電気デマンドバス、電気デマンドタクシーを利用している。
- ・我が家の消費電力を見える化することで、薪ストーブや真空管式太陽熱温水器（※3）が普及している。
- ・エコ（断熱）改修を学ぶ場として、専門家の指導による古民家のリノベーション（※4）を学べるワークショップが開催され、リノベーションの普及により技術者の働く場が増える。
- ・「家庭で食材をおいしく使い切り」運動として、手軽な材料を使った簡単レシピ情報を発信する。

※3 初期投資が少なく効率の良い温水器で、平板式に比べ冬でも温水が冷めないのが特徴

※4 古い建物の良さを活かしながら、新築時以上に性能を向上させたり、住まい手の好みに変えたりすることにより、中古住宅に「新たな付加価値」を生み出す方法

おわりに・・・

---

ひとことで「環境」と言っても、「家庭環境」「社会環境」「地球環境」と、人によって思い浮かべることは様々である。

共通して言えることは、「環境」は我々を取り巻き、我々やその生活と密接に関わっているということだ。

今回のプロジェクトは「地球環境」を守るために、我々ができることを行動に起こし、情報を発信していくためのものである。

省エネやエコという言葉が定着している中で、そのイメージは決して明るいモノではない。どうしても「我慢」の連想が否めない。

そんな中で、環境のプロではないメンバーで構成されたチームだからこそ思い描ける「未来」を想像しながら話し合いを進めた。そこで見えてきたキーワードが、「ライフスタイル・コミュニティ・資源とエネルギー」の3つである。

しまねの特徴である「顔が見える関係、豊かな人間関係」を活かしながら、まずは小さなコミュニティから始め、そこでの取組みが「見本」となり、県内へそして全国へ広がっていく。

そんな、島根県の環境行政を望んで、プロジェクトを進めてきた。

最後に、プロジェクトに参加し、様々な方と意見交換をする機会を得たことに感謝し、この貴重な経験を今後の生活につなげ、まずは自分でできることを始めたいと思う。

平成 29 年 1 1 月

しまね流 エコライフ発信プロジェクト 検討チーム